

# Opening Remarks

## 開会挨拶

奥島 孝康  
早稲田大学アジア研究機構長

みなさんおはようございます。今日は早稲田大学が、今、力を入れております、アジア研究の中でも最も中心となっているグローバル COE のシンポジウムということになります。そういう意味では、早稲田大学の現在のこのアジア研究の蓄積あるいはレベルというものが凝縮された形でもって皆様の前に提示できることになるのではないかというふうに思っております、発表者に少しプレッシャーをかけたいと思います。

ご存知だと思いますけれども、早稲田大学はこれから約 10 数年前ぐらいから学問の本格的な取り組みによりやく着手することができました。それまで早稲田大学は、私学ですから、大して資源もないのにその資源をいろんなところにバラまいて、言ってしまえば砂漠に水を撒くような、そういった研究政策をとってきておりましたけれども、10 数年前からようやく少ない研究資金を集中的に投入することによって早稲田らしい研究あるいは早稲田らしい学問というものの確立にもう一度、挑戦してみようということで、アジアに焦点を合わせるようになっております。

なぜならば、戦前において早稲田大学はアジアにおいて非常に大きなプレゼンスを持っておりました。なぜそういうことになったかと言いますと、それは早稲田大学をつくった方々が、アジアに対しての熱い思いを持っていたから、ということに他なりません。きっかけは、明治 40 年の頃、日露戦争がちょうど終わった頃ですね、早稲田大学は、清国政府と協定を結んで清国留学生部というものをつくりました。ところが、これは言ってしまえば清国の革命派を助ける結果になったために、すぐに取りやめになりましたが、その頃から、この中国大陸からは毎年約 1,000 人のオーダーの留学生が来るようになりました。

そういった伝統を受けて、戦後、我々はこの問題について取り組みを始めたのが大変遅かった訳であります、それでも、現在、早稲田大学が学術協定をして持っている大学あるいは大学研究機関との間の協定数は、約 640 にのぼっております。そのうちのアジア関係の研究機関、大学は約 200 ということでありまして、そういう意味では、早稲田大学が今アジアに大きな軸足をのいた活動をしているということがご理解頂けるのではないかと。そしてわざわざこの 10 数年のうちに早稲田大学の中のアジア研究者が、当時 10 人ぐらいしか存在しなかったのが現在では約 200 人の規模になってきて、早稲田大学がアジア研究の拠点としての再スタートを切る準備がようやく整ったのではないかと、考えている訳であります。

ご存知の通り現在早稲田大学では、この研究を支える3つの機関が存在しております。一つはいうまでもなくアジア太平洋研究科という独立大学院であります。早稲田大学が、アジアに向かうための最初のステップでありまして、これをつくるには大変苦勞致しましたけれども、ようやくそこを突破した後は一気に、アジア研究・教育体制というものが整ってき始めた訳であります。そして第2番目が、現在私が機構長を務めております、アジア研究機構というものであります。これは学内に散在しておりますいろんなアジア研究機関を全体として統合し、調整し、早稲田らしい、アジア研究の方向づけをする、言ってしまうえば、参謀本部と言いますか、アジア学の参謀本部、そういうものができております。近く、『アジア学のすすめ』という本を3冊、弘文堂という書店から出版することになっております。そして3つ目が今日のこのシンポジウムの主催者でありますグローバルCOEという文科省のプロジェクトであります。この3つがうまく連携そして機能し、シナジー効果を出していこうと、こういうことでもってアジア学研究というものが進んでいる訳であります。

この点で、本日のテーマというのは、ここに掲げられておりますように、「経済統合と持続的発展」ということですが、これを担う人材をどうやって育成していくか、これが早稲田大学の現在のグローバルCOEの課題であります。つまり東アジアにおける、志を同じくするというふうに言いますか、もっと端的に言いますと、この東アジア共同体と言われるようなもの、これが実際のEUと同じものであるか、あるいはもっとバーチャルなものか、あるいはまたなんと言いますか、学問を中心としたところからスタートするのか、特定産業分野から始めるか、いろいろな側面がありますので、どこに焦点を合わせるか、現在のところ困難というほかありません。

しかし我々はこのシンポジウムを、アジア地域統合のための高度な専門性を持った人材を育成する、その拠点として、早稲田を作り替えていこうということでもって、現在その努力が続けられておりますが、本日のシンポジウムは、言ってしまうえばその努力の一種の経過点、中間報告になるのではないかと思います。

そういう訳で、アジアの問題というのは、EUのように歴史的な共通性とか、長い共同作業とかというものを持っているという訳ではありません。一口では表せない非常に難しい問題がある。それにしても、東アジアは東アジア世界と言われるような、一種の同じようなメンタリティを共有している。そこでは、経済統合あるいは地域統合ということが行われる、最も可能性が高い地域でありますけれども、しかしそれにしても、そこでもまだまだ非常に難しい問題がたくさん転がっている。例を一つ二つあげれば、地域格差にどういうふうに対応するか、あるいは環境問題というものにどういうふうに対応するか、そういう問題が、大きな壁として立ちはだかっておりますけれども、それに対してどのような対応をしていけば良いか、というようなことというのは、東アジア共同体へ向かってのこれからの非常に大きな課題になっていくのではないかと、思っております。

しかし、いずれにしても、要するにアジアというものの全体的な将来の見通しを考えていきますと、東アジアというものが、その中のいわば統合の核心になっていかなければいけないということは誰の目にも明らかではないかというふうに思います。しかし、その際に

おける地域のガバナンス、あるいはその危機管理ですね、リスク・マネジメント。そういうものをどういうふうに、ひとつひとつ、問題と問題を解決していくかということは、今なお、非常に利害の対立する国家間で一種の中立地帯であります大学が中心になってこういう問題の解決に取り組むことが必要ではないかということでもあります。

私たちはこのアジア問題について、単に分析するだけではなくて提言としてまとめて、いろいろな分野で問題提起をして、そして、学問的にもあるいはメンタリティの面でも、一歩ずつ人々の心を開いてアジア市民としての共通性というものを作り上げていくことに努力をしたいと考えておりますけれども、今日はそのごく一部をこのシンポジウムでお示しすることができるのではないかと、そう期待している次第であります。

そういうことで、皆様もどうか今日のシンポジウムには積極的に参加をして頂き、それぞれの思いを述べ、それぞれのアジアの未来をどうやってつくっていくかということについてのお考えをお聞かせ頂ければということをお願い申し上げまして、私の挨拶に致します。

ありがとうございました。



奥島 孝康（早稲田大学アジア研究機構長）

## 挨拶

天児 慧

GIARI 拠点リーダー

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

本日は、たくさんのみなさんにご参加頂きまして心より御礼を申し上げます。

今日は、アジアにおける経済統合についてじっくり議論したいと思いますが、その前に、本シンポジウムを主催しておりますグローバルCOE「アジア統合のための世界的人材育成拠点」プログラムについてお話したいとおもいます。先ほど奥島アジア研究機構長のほうからご紹介いただきましたように、我々は「アジア太平洋の知の共創」「研究・教育拠点形成」を地域研究と人材育成の面から進めております。具体的に申し上げますと、まず経済分野は、デ・ファクト(de facto)としての地域統合は進んでいるにも関わらず全体を包摂していく制度はない。しかし、それで機能しているといえれば機能しているという不思議な状況があります。

ただ、それでいいかというところではない。なぜなら経済発展に伴って深刻な問題がアジアの地域内において発生し、広がっている。また、アジア各国間での相互不信感も根強いものがある。さらに、既に申し上げたように問題の全体をカバーする系統的な理論も系統的な人材育成の枠組みもない。

多くの人が東アジア共同体や地域統合を語っているし、我々もこれまで語ってきたのですが、今日、鳩山内閣の下で東アジア共同体論が再び息を吹き返してきて、東アジア共同体論、議論が盛んになっています。しかし、そうした構想をどのように具体化していくのかというビジョンも、そのための取り組みもないというのが現状です。我々はなんとか先取りしてそうした課題を克服していきたい。このプログラムの重要な趣旨がそれであります。

アジア自身が、主体的に協力・協働しあえる安定的な制度や組織の構築を目指そうではないかと考えています。我々はこれを、理論構築の面では、地域統合をGIARIモデルにあてはめて考えています。このGIARIモデルを構想するとき、まず理論ありきではなくて、地域の現実を見ることを第一に考える。そして現実にはアジアに起こっている諸問題がどのようなものか、何が問題の核心なのか、どのようにすれば解決に向かうのかといったことを考えていく。そして、国益の視点だけではなくて、アジアの地域益の視点から捉えて問題解決のメカニズムを制度化していくアプローチをとるにいたった訳です。

理論的に考えていきますと、実際起きている問題を共有し、それらを解決していく視点、地域益を目指す視点、制度構築を目指す視点というのは、実は、アイデンティティ、ネットワーク、そしてサステナビリティにつながっていくのではないのかと考えています。これはあとで具体的に説明しますが、そういうものを意識しながら、理論化していくことによ

て、実践的で体系的なアジア地域統合の創造というものを考えていくということでもあります。

一方、人材育成をGIARIメソッドとします。このGIARIメソッドは、私の好きな富士山をイメージしています。富士山には裾野があります。そしてその裾野は大学院全体の関心を向上させて、地域協力・統合に向かっただ様な試みを取り組みと関心をそこへ高めていくことを意味します。中腹の部分は、地域統合の協力者の育成というものを想定しています。ここでは、いろいろな形の支援スキーム、教育指導を充実させて、この地域統合の、いわば、幅広い協力者を育てていくことが目的となります。そしてその中から、特にアジア統合に関わる問題に関心を持ち、専門的に取り組めるような人材、まさにこの頂上の部分にあたる人材の育成を図ろうと考えた訳であります。これがGIARIメソッドですね。

そして、次に、GIARIモデルとGIARIメソッドをくっつけていくというのが具体的な作業になるわけです。これを環境問題、アジア環境共同体形成という事例から説明しておきますと、先ほど申し上げたように、3つのキーコンセプトであるサステナビリティ、ネットワーク、アイデンティティというものを意識しながら、経済発展が進むにつれて深刻化する環境汚染を、サステナビリティの視点から考えた議論がここにあるわけです。これがネットワークの視点になる訳です。さらに、越境性の問題がでてきます。環境汚染の問題を、国を越えて取り組もうというところに協働意識が生まれるわけです。これが、アイデンティティ形成です。そうした知的作業を通して、アジア統合の体系化、包括的な高度専門人の育成になっていくというふうに考えた訳です。

例えば歴史認識をめぐる対立、あるいは、領海、領土、資源をめぐる対立があり、問題解決ができなければもう壁を越えることはできない訳ですね。我々は壁を越えるために、今申し上げたようなかたちで、共通問題を強く意識的に、ランダムにではなくて意識的に、取り組むことによって、協働意識と協力のメカニズムをつくるというふうに考えております。

時間がもう過ぎておりますので、(パワー・ポイントを)最後のところまで飛ばさせて頂きます。我々は今、様々な試みをしております。これは紹介する時間がないので、ぜひ我々の資料、ホームページを読んで頂きたいと思いますが、我々としてはこれだけ様々な活動を進めながら、世界の中のGIARIを目指して、アジアの中のいろいろな大学と連携するだけではなく、開かれた視点から地域統合というものを考えております。つまり、ヨーロッパ、アメリカ等々の大学との連携も強めております。

ひとつ例を挙げますと、ブリュッセル自由大学、私も先月行って参りましたけれども、ここではエラスムス・ムンドゥス計画という人材育成をしています。エラスムス計画では、ヨーロッパに限定せず、世界の地域統合の人材育成に広げようとし、我々のGIARIは其中で、アジアの中で人材育成を協力し合って進めていこうということになりました。地域統合の国際比較、あるいは地域統合の理論の構築と、世界的シェアをもつアジアの地域統合の人材育成を目指し、世界に開かれた地域統合を進めていこうということです。

最後に、このGIARIの目標達成を申し上げたいと思います。2011年度、つまりこれは、このGIARIプログラムが終了する時点の目標として、アジア地域統合を支える博士課程取得者を100名輩出すること、国際舞台への進出、そして、統合の中核、富士山の頂上にあたる部

分ですが、この包括的高度専門人30名を育成すること、そして知的ネットワークの体系化を図ることを目指しております。

これは、机上の論ではないのですが、人材育成はすぐに効果が出るものではありません。我々は、比較的具体的に見える形で成果が出せる理工系の人たちと勝負しなければいけない。これは、非常に歯がゆく、つらいところなのですね。2年、3年で成果が出たら大成果だと私は思っておりますが、今少しずつその芽が育ちつつある。そしておそらくこのプログラムの終了時点では、結構なかたちになって、人材を世に輩出することができると思っております。さらにそれを軌道に乗せれば、非常にダイナミックな人材育成の拠点が生まれてくるというのが私の今の構想であり、夢でもあります。

このプログラムは5年で終わる、2012年3月で終わるわけですが、我々は、そのような短い期間でものを考えてはいません。教育は永遠に続く訳ですから。そういう意味で、2012年後も次へ広がっていくような構想を持ちつつ、アジアの地域統合の人材育成の成果を上げていきたいと思っております。

ぜひとも、みなさん関心のある方、みなさんに、いろいろとご協力を賜われれば、大変、嬉しいところであります。よろしくお願い致します。

どうもありがとうございました。



天児慧(GIARI 拠点リーダー)